

特定非営利活動法人

おokayま人權研究センター・ニュース

発行 センター事務局 2011. 4. 10 第12号

榊利夫『国民融合論の展開』 平島正司さん報告

部落解放運動理論の一大転換

当初、2月例会に予定されていた報告が、やっこの3月27日に発表されることとなりました。

報告されたテーマが、70年代に行われた部落解放理論＝運動に一大転換をもたらしたご承知の表記書物であったことは先にお知らせした通りです。

榊説が、まず何よりも部落解放同盟＝朝田派に対する激しい批判であることは言うまでもありません。部落解放運動の歴史を汚すものとまで、断罪します。

同和対策事業の私物化、暴力路線、部落民以外はすべて差別者とする排外主義、強烈な反共主義、などなど、朝田派に対する具体的な批判です。こうした形で、榊説は、部落解放運動を、朝田派流の排外主義から絶縁させて、新しい国民融合論へ転轍させようとする主張でした。そして現に、それをきっかけとして、戦後の解放運動が大きく転換していったのでした。

では、榊氏のいう国民融合論とは何なのでしょうか。榊氏によれば、明治維新後日本は急速な近代化を進めながらも、古い封建的な諸関係を温存してきており、戦後農地改革によって、地主制度が打破された後にも、封建的な残滓が存続したといえます。もちろん、こうした改革の中で、旧部落と一般部落との生活環境の水平化、一般化が進んでいるので、「全人民の思想、感情、行動の融合、統一の促進」の展望が生まれ

つつあるのだとします。部落差別からの解放とは、「人民解放号という列車の途中駅」にもたとえられるのだ、とします。

こうした観点から、いわゆる「融和」の中には、天皇制が行ってきた「融和政策」、「協調政策」、「自民党自治体同和行政の下請け」などの悪い融和に対して、混住や結婚など人民的融和はよい融和であるとしています。

報告では、さらに北原泰作氏との対談『部落解放への道—国民的融合の理論』にも触れ、北原氏の部落差別とは「前近代的」な「差別」であるとの指摘や、榊氏の「上部構造の意識、心理要素は強い」といった意見が紹介されました。

報告者の感想として、戦後の部落解放理論や、部落論そのものへの言及が少ないのではないかなどが指摘されました。討論の中では、こうした巨大ともいべき解放運動の大転換に際して、岡映は、果たしてどのような位置にいたのか、どのような役割を果たしたのか、はっきりしないといった意見が出されました。

これに関連して、センターに集積された岡映資料集の中、岡映日記が、この融合論が出現する1974年から76年にかけて欠落していることが指摘されました。その意味するところが何であるのか、今後の研究課題のポイントが出てきたようにも思われます。(い)